

現役若手プロ野球選手「セカンドキャリア」に関するアンケート

2011年10月に宮崎にて開催されたフェニックスリーグ中に、現役若手プロ野球選手に対して、今回で5回目となる「セカンドキャリアに関する意識調査」を行いました。以下、集計結果をご報告いたします。アンケート回答者平均年齢が23.7才と若いことから、本調査があくまで「若手プロ野球選手の意識調査」と限定的な位置づけであることを前提に、内容をご確認ください。

対象：フェニックスリーグに参加した12球団所属選手に配布。うち、223名回収(n=223)

調査方法：無記名によるアンケート配布・記入方式

属性：

・平均年齢：23.7才(18～31才)

18～22才 = 76名

23～26才 = 104名

27～29才 = 33名

30才～ = 10名

・プロ野球平均在籍年数：3.4年(1～14年)

・入団前履歴：高校50.7% 専門学校1% 大学30.1% 社会人13.9% その他4.3%

・2011年度平均年俸：829.1万円

・独身既婚比率：80.6%(179)・19.4%(43) うち、子供がいる：27世帯

・主なポジション：

投手／52.3%(114)、捕手／12.4%(27)、内野手／21.1%(46)、外野手／14.2%(31)

※本調査の集計結果は、小数点第二位以下を四捨五入して表記しております。予めご了承ください。

【全体サマリ】

- i 「引退後に不安を感じている選手」は、全体の70%。若干減少傾向にある。
(過去の推移は、75.8→76→74→72%)
- ii 「不安」の内訳は、進路と収入で86.4%。年収よりも、加齢とともに不安を感じる比率が高まる傾向にある。
- iii 引退後、最初に相談する相手としては「家族」が73%と圧倒的。高校・大学時代の監督が次に続く。
- iv 引退後の進路は、高校野球指導者、大学・社会人野球指導者の道を希望する人が多い。
→球界以外の選択肢では、「飲食店の開業」を挙げる選手が多かった。
- v 64.3%の選手が、「貯蓄がある」と答えている一方、25.4%が貯蓄があるかどうか、「わからない」と答えている。

2012.1

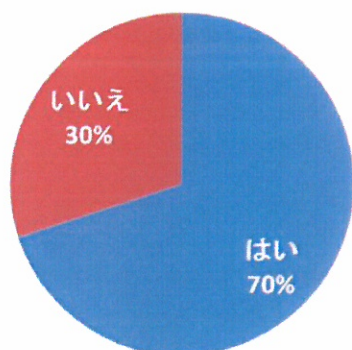
(社)日本野球機構 NPBセカンドキャリアサポート
(株)リクルートエージェント プロアスリートキャリア支援チーム

■集計結果

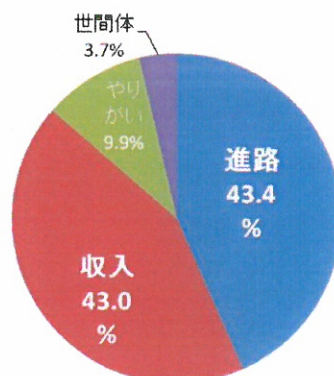
①「現役後」の意識について

【設問】 現役引退後の生活に、不安を持っていますか？ 不安があるとすれば、どれほどのような点ですか？

【図1】不安の有無



【図2】不安の要素

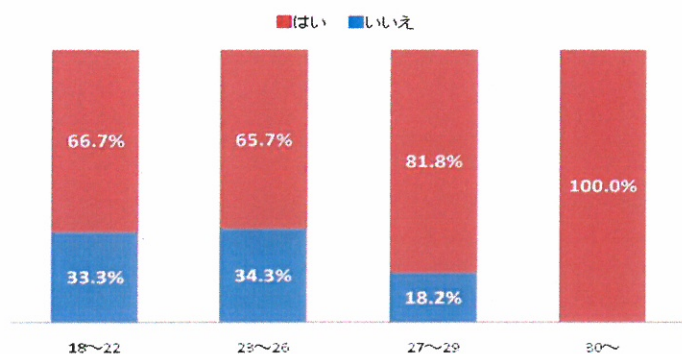


70%の選手が、引退後の生活に対して不安を感じている。【図1】
この数値は、この4年で75.8%→76%→74%→72%と若干ではあるが低下している。

「不安がある」と答えた選手に、不安を感じる理由を聞いてみた(複数選択)。
「生活していけるか」といった収入面での不安と、「引退後、何をやっていけばいいのかわからない」といった進路面での不安を挙げる人で、あわせて86.4%。【図2】

毎回、生活していく上で必要な「収入」よりも、「進路」が不安要素の上位にくる。
セカンドキャリア支援の現場で必ず選手が口にする「これまで野球しかやったことがない」に起因する不安の表出といえる。

【図3】年代別不安有無

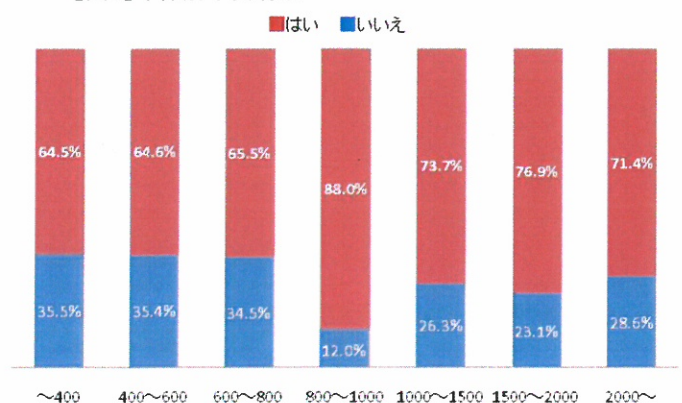


世代別で引退後の不安有無を聞いてみたところ、年齢が上がるに従って「不安」と答える人が増えており、30代(10名)については、全員が「不安」と答えている。【図3】

プロ野球選手の引退時平均年齢が29才であることを考えると、30代以上の選手が何かしらの不安を感じるのも当然といえる。

加齢ではなく、年収との関係性を見てみたところ、高い年俸が不安を払しょくするというものでもないらしい。

【図4】年俸別不安有無



「不安」と答えた比率が最も高かったのが、年俸800~1000万円のゾーン(88%)。年俸が2000万円以上でも、71.4%の選手が「不安」と答えており、平均よりも高い。

一方、最も「不安」と答えた比率が低いのが、年俸400万円以下のゾーン(64.5%)。

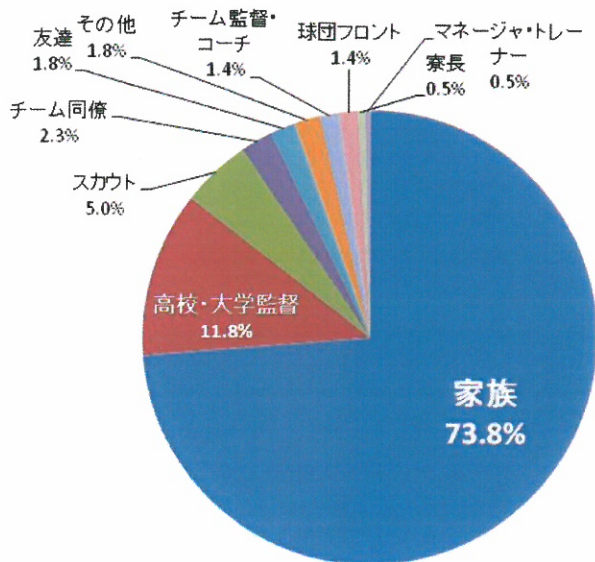
このゾーンは育成選手が多く含まれていると思われる。不安を感じる以前に、期待に満ち満ちている秋季キャンプ、といえるかもしれない。

■ 集計結果

② 相談相手について

【設問】あなたが「戦力外通告」を受けたとします。自分の進路についてあなたが最初に相談する相手は誰ですか？

【図5】最初に相談する相手は？



こうした不安を感じている選手たちが自身の引退を最初に相談するのは誰か。

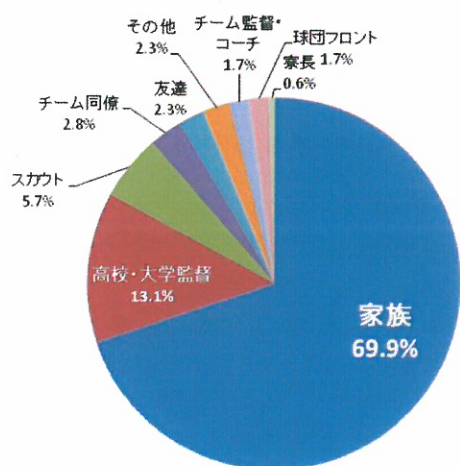
圧倒的に多かったのが「家族」で73.8%。高校・大学監督が11.8%と続く。【図5】

これを既婚者・独身別でみると、既婚者は「家族」を挙げる比率が90%近い。独身者でも、約70%と高い比率を占める。

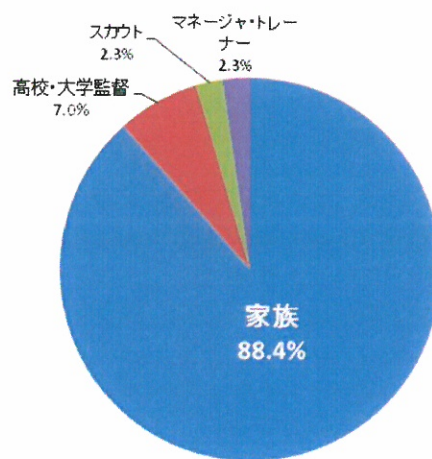
一方、チームの監督やコーチといった、日頃グラウンドで接している人たちに相談する、という比率は1.4%と低かった。

既婚・独身を問わず2位につけたのが「高校・大学の監督」。再就職先を紹介された、といった話もよく耳にする。卒業後も絆は深そうだ。

【図6】最初に相談する相手～独身者の場合



【図7】最初に相談する相手～既婚者の場合

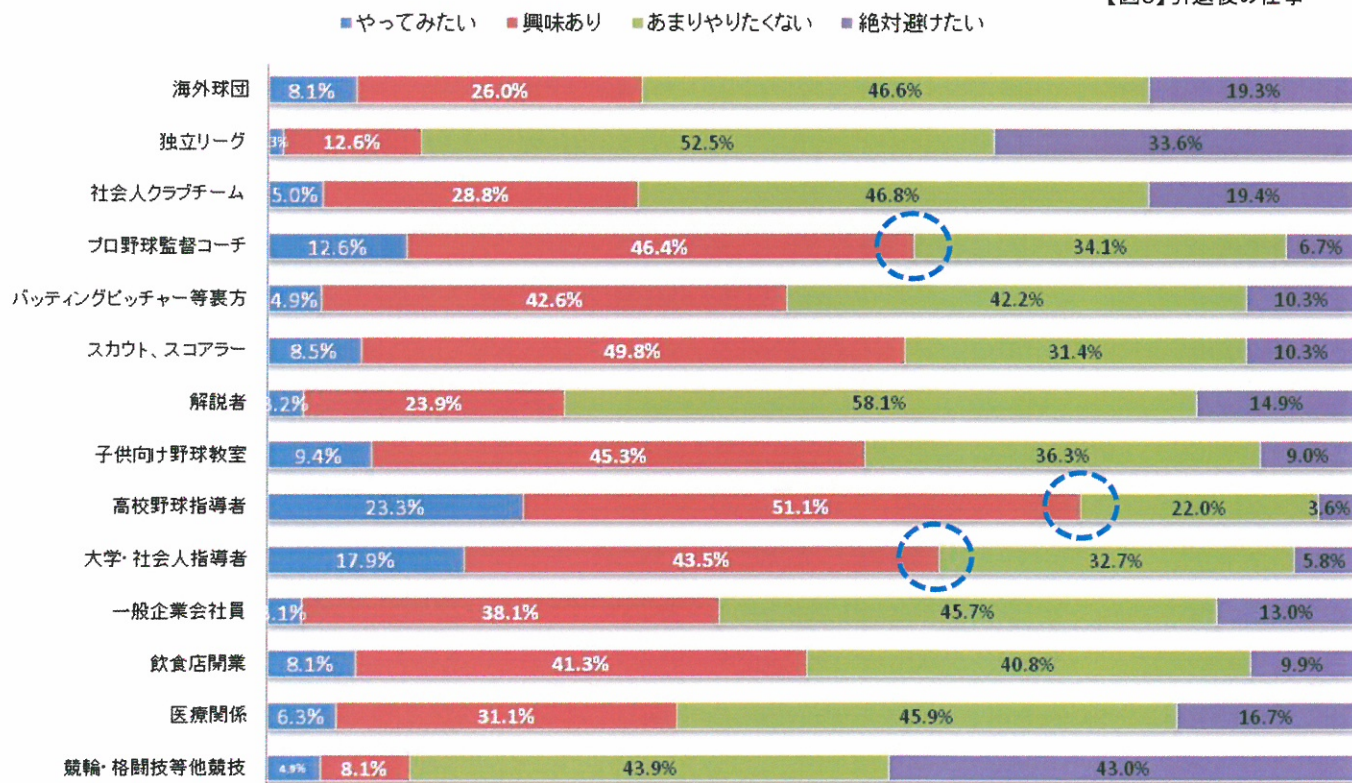


■集計結果

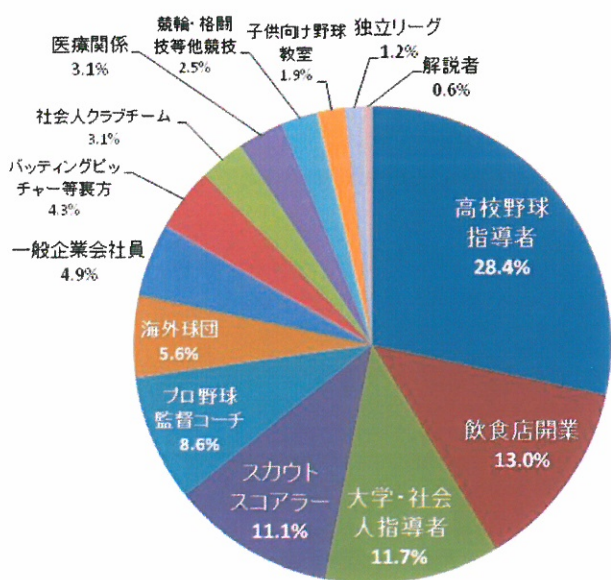
③引退後の職業意識について

【設問】プロ野球選手を引退した後、どのような仕事をしてみたいと思いますか？ それぞれの仕事に対して、当てはまる気持ちに○をつけてください。

【図8】引退後の仕事



【図9】引退後、一番やってみみたい仕事



前回と同様に、高校野球、大学・社会人野球指導者の人気が高い。プレイヤーとして培ってきた経験を指導者として次代に引き継ぎたいという選手の皆さんの思いは、変わらなさそうである。

また、「他競技」や「独立リーグ」は、こちらも変わらず人気が低い。

「一番やってみみたい仕事は何か」という設問に対しても、高校野球指導者がトップ。【図9】

前回、3位だった「飲食店開業」が2位に浮上し、プロ野球監督コーチが10ポイント近く下げて2位から5位に後退した。

後退の理由は定かではないが、選手から見た時に「監督業は苦勞ばかりで報われない」と思わせる何か、今年度は多かったのかもしれない。

フリーコメントでは、「介護士」「学者」「社長」「農業」「トレーニングコーチ」「不動産屋」「プロ雀士」など。

中には、「現役続行」というコメントも。恐らくこれが、選手にとっての本音なのだろう。

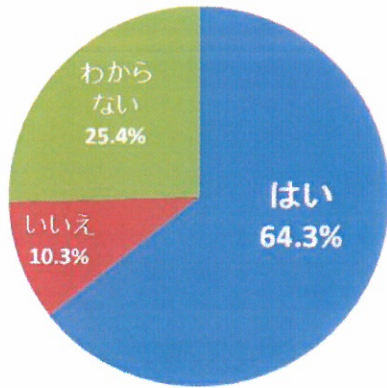
■ 集計結果

④「貯蓄」について

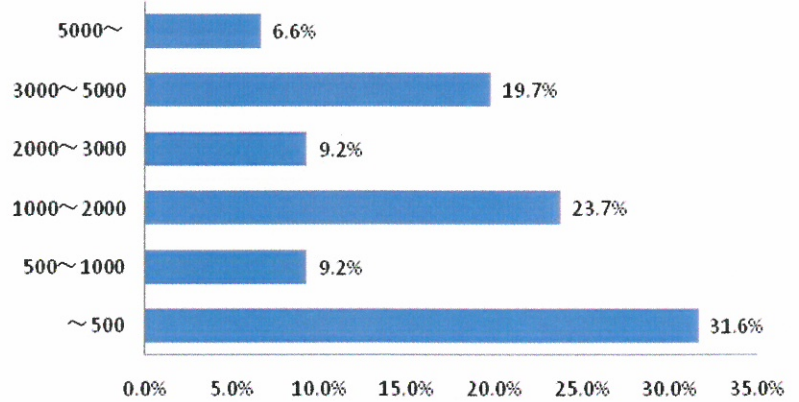
【設問】あなたには今、貯蓄がありますか？（貯蓄とは：現金、銀行預金や財形、株、退団金共済など）→【図10】

【設問】「はい」とお答えになった方にお聞きます。貯蓄額は、いくらくらいですか？ →【図11】

【図10】



【図11】



「貯蓄があるか？」といったシンプルな質問に対し、64.3%が「はい」と答えている（前回は71%）。また、25.4%が「わからない」と答えている（前回は19%）。

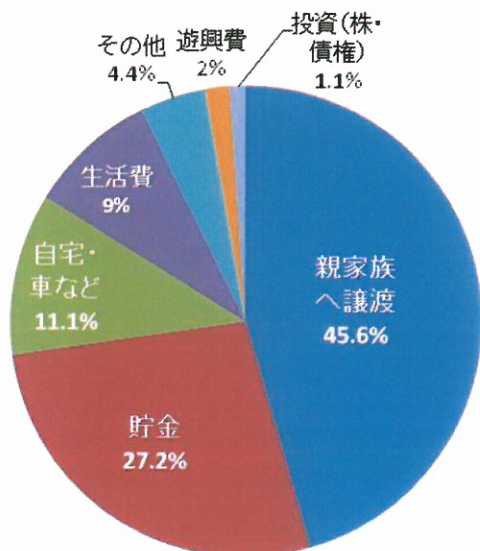
1000万円以上の貯蓄がある選手が、貯蓄ありと答えた人のうち、60%を占める。平均年齢23才、つまり大卒1年目に相当する若者の貯蓄額としては、多いとってよいだろう。

一方、貯蓄の有無が「わからない」人たちが、4人に1人いるこの現状をどう見るか。引退時平均年齢が29才。プロ野球選手として収入を得られる期間がさほど長くはないことを考えると、もう少し金銭に対する当事者意識があってもよいように思う。

若い選手の貯蓄の源泉として想定されるのが、年俸と契約金。契約金は、「なし」から「1億円」まで様々だが、その用途について聞いてみた。【図12・図13】

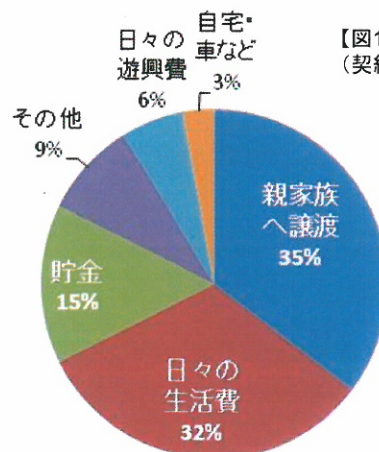
親・家族への譲渡が45.6%と高く、貯金がそれに続く。契約金1000万円以下に区切って集計しても、1位は親・家族への譲渡。日々の生活費が僅差で続く。

【図12】契約金の使い道



「契約金は退職金の前払い」といった発想が球界には根強い。だとするならば、譲渡を受けた親が、子に変わってしっかり管理する責務を追うべき、といった考え方も成り立つように思われる。

【図13】契約金の使い道（契約金1000万円以下）



① 引退後に不安を感じている割合

年 度	平均年齢	不安を感じている割合
2007年	24.1歳	75.8%
2008年	23.9歳	76.0%
2009年	23.4歳	74.0%
2010年	23.9歳	72.0%
2011年	23.7歳	70.0%

② 不安の内訳 (%)

年 度	進路	収入	喪失感	世間体	その他
2008	45	40	9	5	1
2009	45	39	10	5	1
2010	56	37	4	3	0
2011	43.4	43	9.9	3.7	0

③ 引退後一番やってみたい仕事

年 度	1 番	2 番	3 番
2009	高校野球指導者 24.0%	プロ野球監督コー 16.0%	飲食店開業 16.0%
2010	高校野球指導者 26.0%	プロ野球監督コー 17.0%	飲食店開業 16.0%
2011	高校野球指導者 28.4%	飲食店開業 13.0%	大学社会人指導者 11.7%